

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

論文題目：中世スリランカの王権と仏教

氏名：藪内聡子

本論文は、スリランカの歴史叙述において空白であったアヌラーダプラ時代中期（5 - 6世紀）からダンバデニア時代後期（13世紀）にわたる時期を主要な考察対象とし、パーリ語によって記述された Mahavamsa, Culavamsa をはじめとする史書と関連註釈書の綿密な解読をなし、加えて対応する時代の碑文の詳細な調査をとおして、その前後の時代とも関連づけながら、体系的な歴史叙述を試みた意欲的労作である。

客観的叙述にたいする関心が乏しく、仏教的世界観をつねに意識したテキストとしての史料のみが利用可能な古代、中世のスリランカを考察対象とするとき、そこから復元される叙述は、仏教の有する出世間的価値とその象徴を色濃く反映したものとならざるをえないが、この規範的色合いを帯びたテキストが、碑文という異なる次元のテキストに対照され重ね合わせられるとき、そこには歴史とよぶに価する一定の叙述が可能となる。

著者はこうした自覚に立ち、現存する利用可能な文献資料、文献外資料を分析考察し、そこには、王権を中心とする世俗的歴史展開が、仏教の出世間的世界観を構成する中心的な諸要素と密接な関連をもってなされていることを明らかにした。この歴史展開を叙述するに当っては、王と仏、あるいはその異なった位相としての菩薩、転輪王の象徴的關係とその変容（第1章）、物象化された仏としての仏舎利の所有による王権の恒常的正当性の確保（第2章）、サンガの分裂と統合の要としての王の位置（第3章）、サンガの中央集権化と地方分権化、および仏教内部の異なる修行法や救済手段の緊張関係（第4章）、聖典の普及と教育による世俗性と聖性の統一と再編の推進（第5章）、こうした要素を抽出して構造化する必要があることを全篇に亘って論じた。加えてタミル、シンハラ民族対立という今日の問題にいたる歴史の検討（第6章）、仏教以外の出世間的宗教であるヒンドゥー教が王権にたいして有した意味の考察（第7章）を補足した。

細部の議論についてはさらに考察を要する課題を抱えてはいるものの、空白の時代であったスリランカ中世の歴史の体系的叙述を試み、王権のもつ正当性が仏教によっていかに保証されてきたかを複数の視点から立体的に描き出し、さらに中世における寺院の地方分化の実態をはじめ明らかなにした、その成果が現在の学界にたいしてなす貢献は、まことに大きい。

以上の根拠をもって本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授けるに値する論文であると判断する。